

# プレハーノフの飢饉論 (一八九一—九二年) (一)

小 島 定

- 一 はじめに
- 二 プレハーノフの「ロシア資本主義発展論」
  - 1 「人民の意志」派の革命論批判
  - 2 共同体解体論の構成
    - (一) 共同体一般の解体の論理
    - (二) ロシアの農村共同体の解体について
    - (三) 「外的解体論」と「内的解体論」 (以上本号)
- 三 飢饉論とロシア資本主義の構造把握
  - 1 一八八〇年代のプレハーノフ
  - 2 大飢饉の原因をめぐって
  - 3 飢饉克服の方向
- 四 「外発的資本主義像」と「東洋的専制」

## 一 はじめに

さきに筆者は「ロシア・マルクス主義の父」とよばれる Г・В・プレハーノフ（一八五六—一九一八年）のロシア革命論にロシア社会像を、レーニンのそれとの対比において検討する機会があった。<sup>(1)</sup> その折に得られた分析の要点をまとめれば、以下の如くである。

一八八〇年代前半の時点で、プレハーノフはロシアで初めてマルクス主義の見地に立ってロシア社会の現状分析を試み、その分析に基づいて、それまでロシアの革命思想の主流であったナロードニキ主義（プレハーノフもその革命家としての生涯をナロードニキ革命家として始めたのだが）のロシア革命論——ロシア社会が西欧資本主義国とは異質な独自の社会発展を示すとする「ロシア独自性論」に基づき、その独自性のシンボルとしての農村共同体を基盤とする社会革命の展望——に代わる新たなロシア革命の展望を提示した。これを体系的に展開した著作が一八八五年に公刊された『われわれの意見の相違』<sup>(2)</sup>である（以下『相違』と略称する）。プレハーノフの新しいロシア社会認識とは、ロシアもまた、西欧諸国と同じく、他ならぬ資本主義の発展軌道に深く入り込んだということ、したがってそうしたロシア社会の客観的な発展とともに形成されてくるプロレタリアートを真の主体とするロシア革命の展望、ひと口にしていえば「ロシア資本主義発展論」とよぶうるものであった。こうしたロシア社会の基本的な発展方向にかんする見解は、以後ロシア・マルクス主義の現状分析の基調となり、やがてレーニンによって継承発展せられ、それはひとまずレーニンの『ロシアにおける資本主義の発展』（以下『発展』と略称する）（一八九九年）に完成形態をみるに至った（『プレハーノフからレーニンへ』）。しかし、ここに理論的成立をみたロシア・マルクス主義が最初の本格

的な実践的試練を迎える一九〇五年革命（第一革命）に際し、とくにこの革命の根本的な問題となった「農業Ⅱ農民問題」の把握をめぐって、プレハーノフとレーニンは鋭く対立した。両者の見解の対立点は、ロシアの農民大衆が現実の運動として提起した土地要求、なかならずその独特な形態——通常「土地總割替」要求とよびならわされている——の評価にかんしてであった。周知のように、一方のレーニンは、この農民の土地總割替要求を、ロシアの土地所有（地主的土地所有並びに農民の共同体的Ⅱ分与地的土地所有）の特異性に根ざした、特殊ロシア的な民主主義的変革の「核心」を示すものとして、これを積極的に評価して、これを「土地国有論」に総括した。他方、プレハーノフは、農民の土地要求が、地主的土地所有の廃止に結びつくかぎりにおいては、その意義を認めるけれども、「土地總割替」という形態でその実現が果されることは、むしろ古代ルーシ以来ロシアの専制の「固有の經濟基盤」となってきた——とプレハーノフが見做すところの——「古い土地国有」、すなわちロシアの農村共同体Ⅱ割替共同体、の復活強化につながるとして、ロシアの農民運動を本質的に「保守的・反動的な運動」ととらえたのである。それはまた労働運動Ⅱ「西欧的運動」と対比し「アジア的運動」とも表現され、否定的な評価が与えられた。現実が発生したロシアの大衆的農民運動の評価にかんして、ロシア・マルクス主義の内部に発生したこうした対照的な理解は、プレハーノフとレーニンがそれぞれに、この革命を契機に深化させたロシア資本主義の構造的性質把握の方法Ⅱ視角に大きな相違があったことを示す。それは、レーニンにおいては、いわゆる「資本主義發展の二つの道」の理論であり、プレハーノフにおいては、ロシア専制の歴史と構造を「東洋的専制論」の視角からとらえようというものであった（プレハーノフ対レーニン）。

筆者は右の点を確認した上で、第一革命におけるこの両者の対立が、実は初発のロシア資本主義分析Ⅱ「ロシア資

本主義發展論——という初発の両者に共通な認識枠組の中での——における両者の方法的差異に根差すものであったこと、これを論証した。

すなわち、プレハーノフの分析は、ロシアの資本主義發展を、いわば外から（＝西欧から）やってきた資本主義のロシア内部への、そして農村内部への浸透＝定着という視角から把える、いわば「外発的發展論」と特徴づけられるのに対し、他方レーニンのそれは、有名な「市場形成表式」の作成を理論的媒介として、まずもって、ロシア社会の内部に、しかもその最深部に位置する農村共同体の内部に、ロシア資本主義發展の起動力を抽出しようという方法であつて、いわば「内在的發展論」とよびうるものであつた。

以上の点が、ひとまず前稿で確認しえた事柄である。本稿は、右に確認しえた基本的な論点を踏まえ、プレハーノフの初発のロシア資本主義分析における「外発的發展論」の視角と、後に詳しく展開されるロシア社会の独自性把握としてのツァーリズムⅡ「東洋的専制論」との論理的連関について、彼のロシア社会像の展開に即していま一步具体的に検討しようというものである。その際、分析の対象として、プレハーノフがマルクス主義に転換して間もなく起つたロシアの大飢饉、一八九一年から翌年にかけて、ヨーロッパ・ロシアのほぼ全域を襲つた大飢饉について、プレハーノフがその原因と克服の道を探ろうとして執筆したいくつかの論稿をとりあげたいと思う。特に飢饉論をとりあげるその理由は下記の点にある。第一に、この大飢饉の発生自体が、一八六一年の農奴解放を本格的起点として進発した、ロシア資本主義の確立過程における根本的な問題を、直截に表現するものであつたと同時に、それはまた、産業資本確立後ロシアが直ちに直面する本格的危機（一九〇五年革命）の構造のいわば「原型」を示すものとも考えられるからである。したがつて、この飢饉についての分析の中に見いだされるプレハーノフなりのロシア資本主義の構

造的特質把握が、また危機段階における彼の革命構想に大きく波及しているだろう、と予想されるからである。第二に、プレハーノフは、ほぼこの飢饉論執筆に前後する時点で、後にレーニンとの間で争点になる農民運動、その発生基盤たるロシアの農民共同体⇨割替共同体についての認識を一段と深め、とくにその歴史的起源の理解について、マルクス主義への転換時点とはまた異った見解に到達した。そして、この割替共同体の起源と役割についての考察を通じて、プレハーノフは独自のロシア社会論⇨「東洋的専制論」の骨格を端初的な形で構想するに至った、と考えられるからである。

右のような意味において、プレハーノフの一八九一—九二年の飢饉論は『われわれの相違』で示された「ロシア資本主義発展論」と、一九〇五年革命の経験を通じて明確な姿を現わす他方でのロシア社会論、ツァーリズム⇨「東洋的専制論」、この両者を繋ぐいわば結節点としての位置にある、と考えられるのである。今、彼の飢饉論の考察に先だち、まず初発の「ロシア資本主義発展論」の要点を、『われわれの意見の相違』（一八九五年）を中心にして整理し、そこにプレハーノフのロシア社会観が、論理的な可能性の問題として、どのような方向に展開する可能性があったか、この点を確認しておきたいと思う。

(1) 拙稿「プレハーノフ研究の問題点——田中真晴氏のプレハーノフ論の批判的検討を中心にして——」(名古屋大学『法政論集』第七十二号)

(2) Г. В. Плеханов, Наши разногласия. Под редакцией А. Рязанова, Г. В. Плеханов Сочинения, том II, М.-Л., 1923. стр. 89-356.

(3) プレハーノフのロシア社会論⇨「東洋的専制論」は、一九〇五年革命後に著わされた活論な著作『ロシア社会思想史』の

「序説」(《История русской общественной мысли», Ч. I. введение, Соч. XX.)に、その基本的論旨をみることに  
する。

(4) プレハーンフの飢饉についての基本的な文献は「全ロシア的破産」(《Всероссийское разорение》1892)と「ロシアの  
飢饉との斗争における社会主義者の諸任務について」(《О задачах социалистов в борьбе с голодом в России》  
1892)、それぞれ Соч. III, стр. 310-354, 355-420. に所収。

## 二 プレハーンフの「ロシア資本主義發展論」

### 1. 「人民の意志」派の革命論批判

プレハーンフのマルクス主義への思想的転換は、直接には一八七〇年代末、八〇年代初めの革命的ナロードニキ主  
義、「人民の意志」派の革命構想を批判するという形で果された。ところで「人民の意志」派が、ロシア革命運動史  
において占める位置については、すでに多くの研究が示しているように、大むね次のように理解することができる。

「人民の意志」派(一八七九年結成)は、先行するナロードニキ主義の諸運動(例えば七〇年代初めの「ヴ・ナロー  
ド」の運動、七〇年代後半の全国結社「土地と自由」による人民蜂起の企てなど)が、すべて失敗に終わったその  
主たる原因が、ロシアに「政治的自由が欠如していた」ことにある、との総括から出発した<sup>(1)</sup>。いわば革命的インテリ  
ゲンツィアの理想と、ナロード(人民大衆)の生活とを繋ぐ環が断ち切れていたことによる、というのであった。こ  
こから、「人民の意志」派は、ナロードニキ的信条を堅持しつつも、「政治的自由」の獲得に民主主義的制度的確立  
を、革命の第一の課題として、ツァーリ専制に真正面から政治闘争を挑んだのである。「社会革命」を唱え、その思

想的體質として多かれ少なかれ無政府主義的傾向を色濃くもっていた旧来のナロードニキ主義の運動から一步すすんで、「政治革命」すなわち「ブルジョア民主主義革命」の遂行を第一の課題として提起した点に、「人民の意志」派が、ナロードニキ運動の歴史の上で占める新しい段階があった。

プレハーノフは、「人民の意志」派が運動史に記したこの新機軸の意義を確認し、かつての自己のナロードニキ的立場、すなわち「土地と自由」主義の線を忠実に守ろうとした「土地総割替」派の「政治否定」の傾向、無政府主義的傾向を自己批判するのであった。しかし、ロシアの革命運動に新たな局面を切拓いた「人民の意志」派は、その「政治革命」を実行するにあたって、実際にはこの闘争を少数の革命家による権力奪取に（戦術的にはツァーリ暗殺のテロリズムに）集約していったのである。そして、「人民の意志」派は、アレクサンドル二世の暗殺に成功する（一八八一年三月一日）。しかし、その結果はといえば、——彼らが期待していた人民大衆の蜂起は起こらず、また専制の崩壊もたらすことなく——ただ新しい皇帝、アレクサンドル三世の即位と、その下での革命運動に対する徹底的な弾圧と反動体制の強化であるにすぎなかった。（一八八〇年代のロシアは政治反動の時期として知られている。）この結末をみとどけてプレハーノフは、「人民の意志」派は結局「ブランキズム」にすぎず、その点では旧ナロードニキ主義（2）「土地と自由」主義のよりよき伝統であった人民主義（3）、すなわち革命家は人民の中で活動し、革命は人民自身の事業でなければならぬという原則からかえって大きく後退した、と批判するのであった。ここから、プレハーノフは、「人民の意志」派の提起した「政治革命」の意義、絶対主義の打倒（4）民主主義革命の遂行の意義を積極的に評価しながら、同時に本来のナロードニキ主義に固有な実践的精神（5）人民主義（6）の線を継承し、何よりもまずツァーリズム打倒の政治闘争を、「全、ロシア社会の事業」として推進するという方向において、ロシア革命の新たな人民革命の再

生（さしあたってブルジョア民主主義革命、その勝利ののちに社会主義革命を、という二段階革命の構想を含む）を展望するのであった。

だが、「人民の意志」派の革命論に対する批判が、すなわち「人民不在」の革命論だとするその批判が、真に透徹したものになるためには、「人民の意志」派が結局の所「人民不在」に陥らざるをえない、その根拠が明らかにされねばならない。いいかえれば、「人民の意志」派の革命構想を支えていた、彼らのロシア社会の現状認識と発展の見通し、これが問題とされねばならない。この点を剔り出すことによって、プレハーノフは、「ロシア・マルクス主義の父」たる名譽を担うことになるであろう。

それでは「人民の意志」派のロシア社会観、その核心はどこにあったか。「人民の意志」派は、その「綱領」において、現代のロシア社会の分析を、まず「人民」と「国家」の対立、この「二つの自立した主要な力」の対抗という二項図式によって始める。その上で「西欧とロシア」の社会発展の対照性を強調する。「人民の意志」派の理解によれば、一八六一年の農奴解放以後、このロシアにおいても資本主義が発展しつつあるが、その発展は未熟であるばかりか、「ブルジョアジー」と「国家」との関係についてみると、ロシアは西欧社会とは全く逆の相貌を示している。すなわち、西欧では「ブルジョアジー」が（自生的に成長して）「国家」を構成したのに対して、ロシアでは逆に「国家」が「ブルジョアジー」を「創出した」と。更に、今や西欧では資本主義は爛熟期を過ぎて、資本主義に固有な矛盾が露呈しており、「私的所有原理」に基づく社会から本源的な共同性の高次における回復の課題が日程にのぼっている。だが他方ロシアでは、「国家」並びに——「国家」によって「創出された」ところの——「ブルジョアジー」に對置された「人民」の実生活の中に、今西欧社会が希求している「コレクティヴィズム」の要素が、「農村共



「共同体」の形態で現存している。——「人民の意志」派は、このように主張し、ロシアのナロードニ農民の生活と意識中に存続する共同体精神とその展開の可能性に、期待をかけていたのである。

こうした「確信」に従うならば、今、この根なし草的な「国家」ニツァーリ専制政府を打ち倒すことになれば、ロシアの「ブルジョアジー」と「資本主義」も、同時に伐り採ることになるであろう。そして専制国家と資本主義との双方から、今や絶望の淵におとしめられているロシアのナロードは、革命的インテリニ「党」による専制に対する「急襲」があれば、すぐそれにつづいて、必ずや蜂起に立ちあがり、またその「共同体精神」を存分に發揮して——社会主義的インテリの指導宜しきを与えて——ロシアは社会主義へ向って走り出すであろう。「人民の意志」派の革命構想は、大筋このようなものであった。

ところで、右のような「人民の意志」派の主張は、ゲルツェン、チエルヌイシエフスキー以来の、ナロードニキ主義のロシア社会観、いわゆる「二つの道の可能性の思想」(田中真晴<sup>7)</sup>)の延長線上に位置するものといつてよいであろうが、この思想が、いわば極点にまで高まっているのが、「人民の意志」派の一つの大きな特徴であった。「人民の意志」派によれば、「国家」によって「創出された」資本主義は、日々ロシアの人民生活を浸食しつつあるが、しかし、未だ完全には農民共同体を解体させてはいない。しかし、今手をこまねいておれば、この将来の「社会主義の貴重な萌芽」たる共同体は終極的な解体は免れがたい。もしそうなれば、ロシアにおいて「社会主義」は遠い先にか——また西欧社会が述べている道と同じく資本主義発展の長い道のりの果てにしか——期待できないであろう。革命家トカチョーフ(H. П. Ткачев)の「今か、しからずんば永久にだめか、これがわれわれのジレンマである」という有名な発言は、「人民の意志」派の革命家たちに共通な心情を端的に表現しているのである。日々進行する資本

主義の發展を眼前にして、こうした焦燥感が強くなればなるだけ、ロシア農民の共同体精神の不変性、それに対する「確信」は、これをあくまでも保持しつづけようとする者の觀念の中では、かえって強められ、肥大化する可能性がある。それは、一種の「信仰」にまで高まる。S・H・バロンのいう「人民の意志」派にあらわれる「主意主義」voluntarismの拡大はここに一つの根拠をもつ。<sup>(9)</sup>ロシアの農村共同体と共同体精神の「理想化」——これが「人民の意志」派がナロードニキ主義の流れの中で到達した一つの帰結であり、また彼らの性急な革命戦術テロリズムを支えたロシア社会像の核心であった。

だが、「人民の意志」派の革命は失敗に終わる。ロシアの人民はその共同体精神を發揮して「社会主義」へ向って走り出したであろうか。いな、現実には、かつての自己も含め、ナロードニキ一般が考えてきたものを大きく越えて進んでいるのではなからうか、予想に反し人民大衆が蜂起しなかつたとすれば、ナロードニキの現状認識及び社会の發展方向の理解にかんして、どこか大きな誤まりがあつたのではなからうか、プレハーノフは、おそらくそのように推論したのである。ここから、プレハーノフは、ロシア社会の現実の徹頭徹尾客観的な分析の必要性を強調することになる。しかも「人民の意志」派に「主意主義的要素」が著しく肥大化していただけに、これを批判せんとする者の側での思考に、なおさら客観性重視の視点が拡大する可能性がある。したがって、「人間の意識から独立した」社会發展の客観法則を強調する思考が、すなわちマルクス主義が受容される思想的磁場がここに用意されていたといえると同時に、また、プレハーノフのマルクス主義を特徴づけた客観性重視の思考様式<sup>(10)</sup>も、この特殊な条件の中に、その淵源の一つがあつたように思われる。いずれにせよ、こうした社会發展の客観法則の把握という視点にたつて、プレハーノフはロシア社会のトータルな現状分析に入っていくのである。

プレハーノフが行った分析の結論は、ひと口にしていえば、「ロシアは資本主義の学校に入った。」<sup>(11)</sup> というものであった。ひとたびここに入ってしまったならば、そこを卒業しなければなるまい。この修業期間中に、ロシアは新しい社会形成（＝社会主義）のための客観的＝主体的条件を整えるであろう。社会主義のための客観的条件とは、「高度な生産力を備えた資本主義的生産組織」であり、その主体的条件とは、労働者階級の「政治的成熟」である。そして、資本主義の客観的な発展は、否、応なく、共同体を解体せしめるであろう。したがって、ロシアにおける社会発展は、その基本線において、——ナロードニキが主張するのとは全く逆に、——西欧のそれと何ら異なるところはない。資本主義発展の普遍的法則はこのロシアにも貫いている。ここにプレハーノフのマルクス主義への思想的転回が果される。プレハーノフが新しく獲得したロシア社会認識は「ロシア資本主義発展論」とよばれる（その詳しい内容については後述）。

プレハーノフは、こうしてロシアもまた西欧と同じように、資本主義の発展の時期を経て社会主義への展望を切り拓くであろうとの見通しに立つのであるが、しかし、今、この時点で、しかもマルクス主義者へ転換したばかりのプレハーノフの認識には「人民の意志」派の革命性に一定譲歩する姿勢がみられる。今この点に少しふれておこう。それは、ロシアが西欧に大きく遅れて資本主義発展の軌道に入ったことによってもたらされる、ロシア資本主義の「短命さ」についての指摘であり、また、それは当時の（一八八〇年代前半）資本主義世界についてのプレハーノフの表象にも規定されていたものでもあった。

プレハーノフによれば、ロシアが参入した資本主義世界は、いまひとつの転期にさしかかっている。「現代の生産力は販路拡大の可能性を追い越して、国際市場は究極的な充隘状態に近づきつつあり、周期的恐慌は一つの間断なき

犠牲的恐慌に転化する傾向にある。」<sup>(12)</sup>これは、おそらく、一八七三年に始まり八二年の恐慌で第二の底をみせたかの「大不況」の進行が当時ヨーロッパに亡命中のプレハーンノフの眼に映っていたことを意味するであろう。遅れて資本主義世界に入った、未だ幼弱なロシア資本主義は、この世界史的環境の中では長期にわたって安定した生命力を保持することはできないであろう。「わが国の資本主義は最後まで花開かないうちにしぼんでしまふであろう」<sup>(13)</sup>「国際関係の影響」は、ロシアの労働者階級の社会的解放が絶対主義の崩壊のすぐあとにつづくことを期待する権利をわれわれに与える。」<sup>(14)</sup>とプレハーンノフは述べている。

だが、かりにそうだとしても——自国の革命に責任を負うロシアの革命家として、プレハーンノフは基本線にたちもどって語る——西欧で社会主義革命が勝利するまでは、少なくともロシアは依然として資本主義の発展軌道を進むであろう。ロシアの変革が西欧の革命によって大きく左右されるとしても、西欧の革命を単に受動的に待つことはできない。ロシアの社会主義者としていままなすことができ、またなさねばならぬことは、さしあたりロシアが今日進んでいる客観的な歴史発展の方向、つまり資本主義の発展に沿って、革命の陣営を構築することである。<sup>(15)</sup>そのためには、まず第一に、ロシア社会の発展にとつて障害となつてゐるツァーリズムⅡ絶対主義の打倒と政治自由Ⅱ民主主義的政治体制の確立、これをめざして全力をあげなければならない。そして、それと同時に——右にみたような世界的状況下のロシア資本主義においてはなおさらのこと——政治的自由の獲得の後、ただちにブルジョアジー打倒のための闘争に突き進むことができるように、(しかし、その勝利の日までは一定期間が必要であろうが)「労働者階級の組織化」を強力に推進することが必要である。

「ブルジョア民主主義革命」と「労働者階級の組織化」、この二つの課題の遂行——これがロシア社会認識の巡回

II 「ロシア資本主義発展論」の見地に立ったロシア・マルクス主義者の最初の革命論であった。

(1) ヴェーラ・フィゲネル(B. Фигнер)が「土地と自由」の運動について総括した次の有名な言葉が、端的にこれを示している。

「人民の中でのわれわれの仕事が敗北におわつたことを、われわれはすでにはつきりと見ていた。革命党はこれで二度目の敗北をしたことになるが、それはもはや未経験のためではなく、綱領の非現実性、すなわち人民に無縁な目的や理解しがたい理想を無理におしつけようとしたためでもなく、大衆の力や準備にたいする過度の期待のためでもない。われわれは、自分たちの綱領が現実的なものであり、そのかかげる要求は人民生活のなかに現実的な基盤をもっているのだということを意識しながら、退場しなければならなかった。すべての問題は政治的自由の欠如にあった。」(和田・金子訳「ロシアの夜」『世界ノンフィクション全集』第二一卷所収、五九頁)。

(2) プレハーノフは『社会主義と政治闘争』(一八八三年)の「まえがき」の中で、次のように述べている。

「人民のなかで、人民のために活動しようとする志向、『労働者階級の解放は、労働者階級自身の事業である』という確信——わが国のナロードニキ主義のこの実践的傾向は依然として私には貴重なものである。」「傍点はプレハーノフ」[B. Плеханов, Социализм и политическая борьба, Соц. II, стр. 29. 有村有三訳『社会主義と政治闘争』国民文庫、七頁。

(3) Там же, стр. 83. 邦訳、九八—九九頁。

(4) 前掲拙稿、六八—七五頁参照。

(5) 鳥山成人訳「人民の意志党の革命理論」『スラヴ研究』第一号、三二頁。これはЛ・А・チホミーロフ執筆のものとして推定されている「党の任務」(一八七九年十一月十日付)の中にある言葉である。

(6) 同書、三四頁。

(7) 田中真晴『ロシア経済思想史の研究』一九六七年、ミネルヴァ書房、とくに第一章を参照。

(8) 鳥山訳、前掲書、三七頁、またП・H・トカチョーフ「ロシアにおける革命的プロバガンダの諸任務」、松田道雄編『ドキュメント現代史I、ロシア革命』平凡社、一二四頁。

(9) S. H. Baron, Plekhanov: The father of Russian marxism, Stanford u. p., 1963.

(10) プレハーノフのマルクス主義の特徴として客観性重視の点を指摘した田中真晴氏の前掲書を参照。

(11) Г. В. Плеханов, Наши разногласия, Соц., II, стр. 270.

(12) Там же, стр. 231.

(13) Там же, стр. 237.

(14) Г. В. Плеханов, Соц., II, стр. 86, 邦訳一〇四—一〇五頁。

(15) このようなプレハーノフの立場は、以下のような表現の中にも看取される。

「我が著者〔チホミーロフを指す〕はロシアの社会主義的インテリゲンツィアと西ヨーロッパの労働者革命の影響に大きな期待をおいている。我々も同様にその影響の意義を認めるが、しかしそれは無条件にはありえない、と考えている。」

Там же, стр. 315.

「ヨーロッパ革命のありうべき影響力が、いかに強力なものであるにしても、我々はその影響力を現実のものにする諸条件の創出に心を配らなければならない。」 Там же, стр. 317.

ロシア革命と西欧社会主義革命との関連について、プレハーノフは両者の緊密な結びつきをおさえながらも、まず何よりもロシアの側での主体的努力を強調する。こうしたプレハーノフの思想的構えは、当時（一八八〇年半ば）なお「人民の意志」派の革命構想を基本的には支持していたエンゲルスのロシア革命に対する見地とは、おのずと異なっている。エンゲルスの場合、今は亡きマルクスと一致した結論、すなわち、『共産党宣言』ロシア語版第二版への「序文」の中で述べられた周知のロシア革命論（西欧社会主義革命による補充、条件とする、農村共同体の社会主義的転生論）の見地に立っていた

が、その際彼は、あくまで世界史的に國際的視野から、しかもヨーロッパ資本主義が今や最後の苦悶の時を迎えているという西歐資本主義の危機認識（それは当時の「大不況」の事態が彼の表象にあつたと思われる）を媒介にして、ロシア問題を把握していたこと、この点に留意しなければならない（この点については、雀部幸隆『レーニンのロシア革命像』未来社、一九八〇年のとくに第三章も参照されたい）。したがって、エンゲルスにおいては、現実には大不況が終息に向い、資本主義世界全体の危機がひとまず克服されたことが認められると、ナロードニキに著しく接近したかつてのロシア革命の展望、すなわち共同体の社会主義的再生の展望は放棄され、ブナーノフらの「ロシア資本主義発展論」の立場に転換する可能性が開かれてくる。もとよりそのためには、ロシア社会認識それ自体の再検討がなされねばなるまいが。しかし、実際にエンゲルスは、そうした認識転換をとげるのであるが、この転換が、ロシアの内側から——もとより認識の視点に立脚点の話しであるが——問題を眺めていたブレハーノフよりも遅れるのは、けだし当然の事であつたといわなければならない。ちなみに「大不況」の終息は一八九四年のことであつたが、また不況の最後の底をみせた九〇年恐慌は、それ以前の恐慌にくらべると回復力が比較的強かつたといわれている。（宇高基輔『世界恐慌史』講座・恐慌論IV 恐慌史』七九頁。）

また、エンゲルスの認識転換の契機となつたロシア側の事情としては、本稿が取扱おうとしている一八九一年—九二年の大飢饉の発生があげられるように思われる。彼はロシアで発生した大飢饉に注目し、その発生を、ロシア資本主義の苛酷な原蕃過程の帰結としてとらえ、そのプロセスで共同体の解体が著しく進行した点を強調している。更に迫りつつある——と従来くりかえしエンゲルスが警告してきた——ヨーロッパ戦争の危機が、この飢饉の発生によって回避される可能性がでてきたことについても言及している。なぜなら、飢饉の発生は、ツァーリズムを財政破綻に追い込んだのであつて、ヨーロッパ戦争の危機の元凶——とエンゲルスには理解されていた所の——ロシア・ツァーリズムは、今や本格的な戦争準備を整えることはできないだろうから、と。（エンゲルス『ドイツにおける社会主義』一八九一年十月、『マルクス・エンゲルス全集』第二二巻、二六二頁以下、同『ヨーロッパは軍備を縮小できるか』一八九三年三月、『全集』同上、三九一頁以下、同

「一八九二年四月一日のフリードリヒ・エンゲルスの『レクレーール』紙特派員とのインタヴュー」同上、五二六頁以下。なお九一年八月以降九二年をつうじて、エンゲルスの書簡にはこの点についての言及が頻繁にでてくる。例えば九一年八月一七日付ラウラ・ラファルグ宛手紙、『全集』第三八巻一一五頁以下、九一年九月二九日付アウグスト・ペーベル宛手紙、同上、一二八頁以下等々。）

更にいえば、エンゲルスがロシアの共同体について、ダニエリソンとの見解の相違を明示的に語ったのは、飢饉の印象間もない、一八九二年三月一五日付ダニエリソン宛手紙においてであった（『全集』第三八巻、二六二頁以下）。なお和田春樹『マルクス・エンゲルスと革命ロシア』、三〇一頁以下を参照。

ともあれ、ブレハーノフはマルクス主義者に転身するその時には、結論としては、『共産党宣言』ロシア語版第二版「序文」のマルクスやエンゲルスのロシア社会発展像に革命像と乖離することになったけれども、そのこと自体について、そこに『ロシアマルクス主義の困難かつ不幸の成立』があつたとする評価がある（和田、前掲書、二〇八頁）。しかし、こうした見解は、右に述べたように、エンゲルス、マルクスとブレハーノフとの間にあるロシア問題への取組の仕方、構えのズレ（それはそれで仕方のないこと、あるいはむしろ当然生じうるズレでもあろう）を考慮するならば、直ちに首肯することはできない。かえって、そのような評価は、自らナロードニキとして革命運動に身を投ずる中で逢着したナロードニキ主義の思想的危機を、現実的・具体的に突破しようとした、ブレハーノフの理論的・実践的営為をあまりにも過小評価するものといわざるをえない。

## 2 共同体解体論の構成

ところで「人民の意志」派による「革命」の破綻が明確になるとともに、「人民の意志」派において極点に達して



いた、かの「二つの道の可能性の思想」もまた、そのものとしては解体する（六〇—七〇年代の革命的ナロードニキ主義の解体）。プレハーノフのマルクス主義への転換は、この隘路から脱出する一つの方向であったが、もとより、なおナロードニキ的信条を保持しつづける者もいなかったわけではない。むしろ八〇年代は、マルクス主義者グループは少数派であつて、多くのナロードニキ的潮流は、この七〇年代の革命的ナロードニキの思想的危機に対して、別の方向からの理論的対応を試みた。ここに、八〇年代—九〇年代の政治的反動期に、ナロードニキ主義の再編形態として、新たに「合法的自由主義的ナロードニキ主義」が登場する（起点——ヴェ・ヴォロンツォフ『ロシアにおける資本主義の運命』В. Воронцов, Судьбы капитализма в России. 一八八二年）。この思想には「今か、しからずんば永久にだめか」といった緊迫感はもはやない。彼らの主張は、——「人民の意志」派の認識に対比していえば——ロシアにおける資本主義の一次的な定着をみとめるけれども、しかし、資本主義は結局のところ、ロシアの土壌（彼らの言葉をつかえば「人民的生産」の世界）に根づくことはできず、早晚没落を余儀なくされている、というものである。この思想は、「ロシア資本主義没落論」ないし「不可能論」とよばれる。ここには、七〇年代のナロードニキ主義を特徴づけた革命性は完全に失われている。この「ロシア資本主義没落論」は、九〇年代に入って本格化するロシア資本主義論争の中で、一方の極となつて、プレハーノフにつづいて登場するレーニンが、これに真正面から批判を加えることは、よく知られた事実である。しかし、このような主張が、八〇年代前半の実は解体期の「人民の意志」派の中にも一部分浸潤するといった事態がみられた。<sup>(1)</sup>プレハーノフが、ポジティブなロシア資本主義分析を試みた『われわれの意見の相違』（一八八五年）においては、「人民の意志」派の理論家、チホミーロフ（Т. А. Тихомиров）が主たる批判の対象とされたのであるが、このチホミーロフのロシア社会把握はまた、ヴォロンツォフ

の「ロシア資本主義没落論」の諸命題によっても理論的に補強されていたのである。したがって、プレハーノフの『相違』は、七〇年代ナロードニキを特徴づける「二つの道の可能性の思想」と、八〇年代後半―九〇年代ナロードニキを特徴づける「ロシア資本主義没落論」を共に批判するという課題を負っていた、ということが出来る。「没落論」の主要な命題は、周知のように、ロシアの資本主義にとつての市場問題―市場不足論（外国市場国内市場ともに）にあり、プレハーノフも『相違』の中で、ヴォロンツォフの主張する市場不足論に批判を加え、現物経済から商品経済への転化が、「市場の拡大を伴なう」、あるいは「市場は生産とともに発展する」という指摘はしているけれども、すでに知られているように、社会的分業―市場の視点にたつて理論化されたレーニンの市場形成理論ほどに精緻なもの、プレハーノフにはない。<sup>(2)</sup> ナロードニキの市場理論（―市場縮小論）に対して、批判のための有力な理論基準を提供した再生産論―実現理論、これを含むマルクス『資本論』第二部を、プレハーノフが『相違』執筆の段階では利用できなかったことも、その一つの制約となつたことは否みえない。ちなみに『資本論』第二部の刊行は、『相違』の公刊と同じ一八八五年のことである。レーニンのナロードニキ理論に対する批判の軸が、その市場理論批判にあつたとすれば、プレハーノフの批判は、主としてナロードニキの共同体論―共同体の「理想化」に向けられていたといふことできる。共同体の解体にかんする理論的―実証的な説明こそ、最初のマルクス主義者―プレハーノフにつけつきられた第一の課題であつたのである。また『相違』（一八八五年）と『発展』（一八九九年）との間には、難澁をきわめたロシア資本主義の確立過程のラストスパートともいえる、「ヴィッテの工業化」の一時代が横たわる。<sup>(3)</sup>したがって、プレハーノフの『相違』は、一方九〇年代の革命性を喪失した合法的―自由主義的ナロードニキ批判を主たる実践的課題としたレーニンの『発展』とは――ロシア・マルクス主義の展開の上での――一定の段階差が認め

られるのである。こうした客観的、主体的条件の差異を考慮した上で、プレハーンフのロシア資本主義分析を検討する必要がある。したがって、われわれの考察もまた、彼の共同体解体論に焦点をしぼることになる。

さて、ロシアの農村共同体は「不変の生命力」をもち、「資本主義」に対する「不落の砦」をなすと主張するチホミロフ・ヴォロンツォフに対して、プレハーンフの主張は、現時の共同体は資本主義の発展に耐えられないばかりか、すでに共同体内部に農民層の分化が拡大しており、今やその終極的解体によってしか解決しえない矛盾が顕在化している、というものであった。<sup>(4)</sup>プレハーンフは、かかる共同体の解体過程を分析するに当たっては、まず第一に、共同体一般の解体のレベルで論理的な説明を行ない、次にそれに従って、ロシアの共同体の解体過程を分析するという順序で議論を展開している。われわれもそれに従ってプレハーンフの共同体解体論を追ってみよう。

#### (一) 共同体一般の解体の論理

プレハーンフによる共同体解体論の論理的起点は、まず、農村共同体は決してロシアに独自の存在ではなく、「原始共產主義の解体の一段階」<sup>(5)</sup>に出現する、その意味で世界的普遍的な存在である、という点におかれる。農村共同体存立の基礎は、何よりも「現物経済の諸条件」にある。それはマルクスが『資本論』の一節で「アジアの社会の不変性の秘密」として触れたところの、「自給自足的共同体の単純な生産有機体」として特徴づけられるものである。<sup>(6)</sup>したがって、原理的にいえば、共同体が「現物経済」から離脱して、「貨幣経済と商品生産」の条件下におかれることによって、必然的に解体を始める。というのも、貨幣経済と商品生産は、生産手段と生産物に対する私的所有を不可欠の前提とするのであって、この私的所有の原理は、土地の共同所有を基盤とする共同体的原理とは相対立するものだからである。

それでは現物経済から貨幣・商品経済への転化のプロセスをプレハーノフはどのように説明するか。(7) この転化の必然性は、「原始共同体」(私的原理を含まない共同性の全般的支配と考えられている)に孕まれる「固有の矛盾」から生まれると、いう。では「原始共同体」に「固有な矛盾」とはなにか。それは、プレハーノフによれば一つの共同体の内部に存する「共産主義的原理」は他の共同体との間の関係には及びえない、ということのうちにある。すなわち共同体と共同体の間との関係は、それぞれの共同体の側からみればそれ自体としては一つの排他的な関係であって、その結合は経済的には「交換」をつうじてしか形成されえない。交換はとりもなおさず貨幣・商品関係を生みだす。したがって、プレハーノフによれば、共同体に敵対的な私的 $\parallel$ 個的原理は共同体の外部に、共同体間において、はじめて発生するとされる。かくして、まず最初に共同体の外部に、また共同体間に発生した商品交換は、それがひとたび恒常化すれば、次第に共同体内部にも侵入して、共同体内部に私的 $\parallel$ 個的原理を——それはまずはじめに動産の私的所有として始まり、次に不動産の私的所有へと転移する——拡大させていく。

現物経済から貨幣・商品経済への転化、共同体内部における私的所有の原理の発生を、ひとまず右のように説明した上で、プレハーノフはこの転化を促進する強力なモメントとして——それ自体がまた共同体にとっては外的契機であるところの——「国家」ないし「政府」による租税政策の意義に、人々の注意を喚起する。

「貨幣経済の発展は、それはそれで生産諸力の発展、すなわち社会的富の増進の結果ではあるが、この貨幣経済の発展は新しい社会的機能を生みだす。それを維持するには旧来の現物形態の租税徴収システムをもってしては不可能であろう。貨幣を必要とすることから、政府は国内への貨幣の流入を増大させ、社会経済生活の活力を高めるような社会運営上の諸措置と諸原理〔個人主義的原理〕——引用者〕を支持せざるをえない。」

このように、プレハーノフは、原理的には現物経済から貨幣⇨商品経済への転化に共同体一般の解体要因を求めるのであるが、その際、この転化の過程が共同体間に（一つの共同体の外部に）おいてはじめて発生し、それが共同体内部へ浸透するという形で把握されているために、この共同体一般の解体を論ずるレベルにおいても、それ自体が共同体にとっては外的な存在たる「国家」ないし「政府」の租税政策が共同体の解体促進の重要なモメントとして、プレハーノフの論理の中で特別な意義を与えられることになる。この点は、プレハーノフの共同体（解体）把握を特徴づけるものとして留意を要する事柄である。

(二) ロシアの農村共同体の解体について

共同体一般の解体の論理を、以上のように把えたプレハーノフは、今度はロシアの農民共同体の実態と解体過程について論をすすめる。

上述の論理からすれば、ロシアに今日まで共同体が比較的根強く存続してきたのは、まず第一にロシアの貨幣・商品経済の発展がごく最近のことだ、ということの意味するにすぎない。

「農奴制の廃止まで、ほとんどすべての共同体的な、しかしかなり国家的でもあったロシア経済は、現物経済であつて、共同体にとってはきわめて適合的であつた。」<sup>(9)</sup>

農奴解放以前に起つた幾多の政治上の諸事件や動乱も、それがいかに激烈なものであつたとしても、「社会経済における根底的な変動の前兆ではなく、たんに個々の共同体間の相互の諸関係の結果であるにすぎない。」<sup>(10)</sup> その変動の外見上の激しさにもかかわらず、社会の「土台」には——ナロードニキの表現を借りていえば——『人民生活の古くからの基礎』つまり農村共同体が揺ぎなき存在を保っていたのである。だが一八六一年の「農奴解放」は、ついにこ

の社会の「土台」に手をつけた。

農奴解放は、プレハーノフにあつては、ロシア経済の基調を大きく現物経済から貨幣・商品経済へと転換させ、共同体を最終的解体に導く転換点と把握される。そして、しかもかかる「農奴解放」へとロシアを促した力は、またしても外的な諸力であつた。すなわち、プレハーノフのいう「国際関係の影響」がそれである。「二月一九日の改革〔「農奴解放」〕は、新しい経済的潮流へのやむをえざる譲歩であつた」とプレハーノフがいうとき、機械制生産力段階に到達した西欧資本主義の外圧Ⅱ「クリミア敗戦」を契機とするロシアの農奴解放の開始、上からの資本主義化の進発という事態が彼の眼に映つている。農奴解放がロシアの農村共同体に対してもつた特別の意味について語るとき、プレハーノフは、「買戻操作」に注目した。農民分与地の「強制的買戻」の措置は、農民にとっては、貨幣形態による租税徴収に他ならない。しかもその額は農民の「分与地からの収入」を上回るほどに高額であつた。「買戻し」の強制は、農民の貨幣需要を生み、その内容はどうであれ、それはそれで農村の貨幣Ⅱ商品経済の発展を促した。またそれは、形の上では、土地の私的所有原理を法的に公認するものでもあつた。したがつて、こうした内容をもつ農奴解放をもつて、プレハーノフはロシアの共同体の歴史に終止符を打つものと理解するのである。<sup>(12)</sup>

分与地からの収入を上回る租税の収奪は、もはや分与地にのみ依拠する農民経営の再生産を許さない。<sup>(13)</sup>すでに今日では、ロシア農民の四分の一が、その主要な生産手段たる役馬の所有を喪失しており、「独立の農業経営」は不可能となつている。彼ら馬なし農は「プロレタリアートの候補生」である。彼らは家計補充のために、貨幣を求めて出稼ぎに赴いているが、その結果は、広範な規模での「分与地耕作の放棄」である。そして他方で、きわめて少数の富裕な農民の手に、役畜と分与地が集積している。<sup>(14)</sup>こうして農民共同体の内部に農民層の分化Ⅱ分解が急速に進行して

いる諸事実を示しながら、プレハーノフは、ロシア農村の内部分裂の原因をまず第一に「国際関係の影響」（西歐資本主義のインパクト）によって開始された農奴解放、及びそれを起点とするツァーリ政府の資本主義化政策にもとめるのであった。したがって、ロシア共同体の解体の主要な原因は、「国家」による「買戻」の強制<sup>(15)</sup>苛酷な租税収奪システムにある、と把握していたのである。

しかしながら、かかる「国家」による租税収奪も、共同体にとってはさしあたり外側から加えられた圧迫である。そうだとすれば、この「租税の重圧」が、今仮りに除去せられたとすれば（それは民主主義革命の勝利ノを意味する）、そして少くとも農民経営の生産 $\parallel$ 再生産への可能性が保障されたとすれば、今解体しつつある農村共同体は、再び本源的な共同性 $\parallel$ 平等性を回復するのではなからうか。共同体の解体が、上述のようにもっぱら外的契機によるものだとする理解にとどまるならば、そうした推論も論理的には可能であろう。事実、ナロードニキは、農奴解放後十数年を経た時点において、プレハーノフが指摘した農村社会の事実それ自体は、すなわち、一方での貧農の土地放棄と貧窮化と他方での富の集積が農村内部に進行しつつある事実それ自体は否認していたわけではない。七〇年代末の革命的ナロードニキ、例えば「人民の意志」派は、かかる事態の進行をみていたからこそ、——そのやり方にはいかにも性急で稚拙なところがあったけれども——「国家」による「租税の重圧」を打破するために、「国家」に戦いを挑んだのであり、それによってロシア農民の共同性 $\parallel$ 平等性の「理想」を救い出そうとしたのであった。「人民の意志」派のみならず、ナロードニキはすべて共通に農民層の内部に発生した不平等、農民層分解が、共同体内部に内在的に用意された要因によるものとは考えていなかっただのである。むしろ逆に、共同体解体の主要な原因は、共同体の外側から加えられた「有害な影響」にあるのだ、すなわち、「国家」による租税の重圧や、また「国家」に育成され

た「資本主義」による農村収奪といった、——ナロードニキの眼からすれば——「人為的な」要因にあるのだ、と考  
えていたのである。したがって、ナロードニキはこうした共同体に対する「有害な影響」が取り払われるならば、共  
同体は再びその理想的な共同性 $\parallel$ 平等性を回復するであろうと主張して、ある者は「国家」に対する正面からの闘争  
を行ったのであるし、またある者は「人民的生産」を救済せんとして、協同組合、小土地信用、共同体借地、農業改  
良など農民的な諸改革を社会に訴えたのであった（八〇年代—九〇年代の合法的・自由主義的ナロードニキの場合が  
これである）。ロシアの共同体には、それが不可避免的に解体するような内、在的、な要因は、それ自身のうちに存在して  
はいないのだ、——ここにナロードニキ主義に共通な共同体擁護論の核心があったといふことができる。したがって、  
かかるナロードニキの「確信」に対しては、次のような論理が必要となる。すなわち、仮りに「国家による租税の  
重圧」が取り払われ、またいわゆる農民の「土地不足」（これはいうまでもなく地主的土地独占 $\parallel$ 地主的土地所有の  
支配の帰結である）がいかなる方法であれ（革命的な方法によるのであれ、或いは地主的改良的方法であれ）、解消さ  
れたとしても、いいかえれば、ナロードニキの主張する「理想」が仮りに実現した場合でも、農村の不平等と分解は  
とどまることなく進行するであろうこと、否、そうした場合にはむしろ逆に共同体の解体は一層急速にすすむであ  
う、といふこと、このことがそれ相当の論拠をもって明示される必要がある。プレハーノフ自身も、この論点を充  
分に意識し、その論理の究明に力を傾注している。プレハーノフの論証の仕方は以下の如くである。<sup>(16)</sup>

まず第一に、ナロードニキの主張する「理想的共同体」に近似する事例として、「分与地からの収入が課税額を上  
回る」共同体、すなわち富裕な共同体をとりあげて、この共同体が実際にいかなる傾向を示しているか、これを分  
析した。そこに見いだされる重要な事実は、割替から次の割替までの期間が——この富裕な共同体とは逆に「課税額



の方が分与地収入を上回る」共同体と比べて——比較的長くなる傾向にある、という事実である。

割替の期間の長期化とは、いうまでもなく、各個別農戸に割当てられた同一分与地の利用が長期にわたって保障されることを意味する。そのことは、個別農戸の勤労と土地改良（とくに施肥の投下）への意欲を刺激し、その結果はまた、「割替」の停止⇨個別農戸所有への移行をおしすすめるであろう。こうして、農民経営にとつて良好な条件にある共同体における割替期間の長期化という事実を示すことによつて、たとえ共同体の外部からの作用がなくても、共同体的土地所有に対抗する「個別農戸相続所有」(подпорочное наследство)の成長の原因が、共同体それ自身の内部に自生的⇨内在的に用意されていることを示唆するのである。

では、割替期間の長期化、共同体的土地所有から個別農戸土地所有への移行は、共同体自体のいかなる構成原理に由来するのか。この論理を把み出しえたとき、共同体の内的解体の論理が、プレハーノフによつて把握されたといいうる。プレハーノフは次のように述べている。

「そのような平等はそれ自体として農村共同体の中ではきわめて不安定なものである。農村共同体では、ミールミールの土地の上で、個別家族による経営が営まれており、それぞれ自立した共同体成員が自己の責任とリスクにおいて、分与地として彼に所属する土地を耕作している。役畜の数、農具の質、家族の労働力が、個々の農戸の収入を決定的に多様化させる変数となっている。」<sup>(17)</sup>〔傍点はプレハーノフ〕

土地は共同所有であっても、分与地での経営⇨再生産単位は個別農戸に存する。したがつて各農戸の私的所有になる役畜、農具など経営手段や労働力の質量差が、農戸間の収入差を生み出し、それが共同体所有を掘りくずす私的⇨個的原理の拠点だ、というのである。そして、また、現時点ではこの経営の私的性格こそが、ロシアの農業生産力を

上昇させる槓杆でもある、とプレハーノフには理解され、その農業生産力の上昇がまた、共同体を解体に導く「新たなファクター」<sup>(18)</sup>ともなる、といわれるのである。ここには、事実上共同体解体の内在的要因としてのいわゆる「共同体の固有の二元性」の把握がある、といつてよい。

こうした共同体の内的解体の論理をふまえた上で、ふりかえって、ナロードニキの主張する「社会革命」、その農業綱領である「土地社会化」の帰結を想定するならばどうであろうか。「土地社会化」とはさしあたり「大土地所有を没収し」、その土地を共同体に引き渡すことを意味する。それはまた、農民の、いわゆる「土地不足」を解消し、農民経営に蓄積可能性を確保することを意味するものであろう。

「その時の共同体は現在の三倍近くの土地を持ち、ひよつとしたらもつとゆっくりと解体しはじめ、したがつてもつとゆっくりと高度の共同生活形態のために道をはききよめると思われるかもしれないが」、<sup>(19)</sup>しかし、そこでも耕作||経営自体は、やはり各農戸別に営まれているのであるから、——「土地社会化」は、各農戸の私的経営を前提とするものである——、現実の土地利用の規模は、各農戸の所有する経営手段、労働力の質量差に照応したものにならざるをえない。プレハーノフは、平均的な農民の土地所有規模を上回る農民的土地所有をもつドン・コサツクの例をとりながら、また次のように言うのである。

「土地が豊富であることは、不平等の発生、それとともに富める者による貧しい者に対する搾取からコサツクを救いはしなかった。それどころか全く逆である。土地が豊富であることそれ自体は不平等を促進させるのであった。」<sup>(20)</sup>

かくして、ナロードニキの主張する「土地社会化」も、ロシア農村の共同性||平等性を回復し、ロシアにおける「社

会主義」への飛躍をもたらすものでは全くない。むしろ、共同体の分解を更に一層拡大し、促進さえするのであって、それはロシアにおける資本主義の発展をはやめることにほかならない。プレハーノフはこのように主張するのである。これはまさしく、ナロードニキ的ロシア社会像の根本的矛盾を明らかにしたものであって、プレハーノフのここでの論述は、ナロードニキ主義の思想的根幹に触れるものがあつた、といつてよい。

③ 「外的解体論」と「内的解体論」

以上みてきたように、プレハーノフは、ロシアの農村共同体の解体⇨資本主義発展の必然性を論証するにあたって、まずロシアの農村共同体が「原始共産主義の解体期」に出現する世界的⇨普遍的な存在であることを示した上で（ナロードニキの「ロシア独自性論」批判）、この解体過程の必然性を、いわば二重の論理をもって説明したということが出来る。すなわち、第一に、農民に対する「国家」の苛酷な租税収奪の結果として説明する論理（これをさしあたり「外的解体論」と名づけておこう）、及び第二に、土地の共同所有と経営の私的所有との内在的矛盾の把握（これを「内的解体論」とよんでおこう）、これである。

ところで、右にみた共同体の解体過程についての、プレハーノフの二つの論理は、彼のロシア資本主義分析全体の構成の中で、いかなる関連づけが与えられているであろうか。今この点に入つて考察する必要がある。それは、彼のロシア資本主義認識の特徴とその後の展開を見通す上で一つの要点を成すと考えられるからである。

たしかに、すでに述べてきたように、マルクス主義への転換点に立つ、ナロードニキ批判のレヴェルにおいては、プレハーノフは共同体の「内的解体論」を強くうちだしている。この点を把えないことには、右にみたようにナロードニキの共同体論を真にくつがえすことはできないからである。にもかかわらず、すでに共同体一般の解体プロセス

について論ずる場合にも、「国家」の租税政策、それによる貨幣・商品経済の促進というモメントを彼はことさらに強調していたし、また、ロシアの共同体について論ずる場合にも、その解体Ⅱ私的土地所有への移行の歴史的起点として位置づけられた「農奴解放」について、とくにそれを促した強力な契機として、「国際関係の影響」に特別な意味を与えていた。「人民の意志」派のロシア社会認識の批判を直接の課題としていたレヴェルとはひとまず別に、——しかし完全にそれから離れてというわけにはいかないが——プレハーノフ自身のロシア資本主義発展像をそのものとして（その後の展開も含めて）再構成しようとする場合には、プレハーノフの論理のそうした特徴は看過しえないものがある。実際、プレハーノフ自ら述べているように、彼はロシア資本主義の発展を、西欧資本主義と対峙するロシア共同体という基本的枠組の中でとらえていたのである。彼は次のように言っている。

「モスクワ専制の基礎には、まさに我が国のナロードニキを魅惑した『人民生活の古くからの基礎』があった。反動的な男爵ハクスタウゼンも、革命的なアジテーター、バクーニンもこれを同じく明確に理解していた。もしロシアが西ヨーロッパ生活の経済的政治的影響から孤立していたならば、歴史はいつ終極的に政治構造の経済的土台を掘りくずしてしまいかを予見することは困難であつただろう。しかし、国際関係の影響は貨幣経済と商品生産の、緩慢ではあるが、自然的な発展過程を促進したのである。」<sup>(21)</sup>

ここには、もし「国際関係の影響」（西欧資本主義のインパクト）がなかったとすれば、ロシアは専制の「土台」であつた農村共同体を永続的に存続させるかもしれない、との推論に余地を残すものがありはしないか。

プレハーノフのロシア資本主義発展像の枠組の中では、「国際関係の影響」の契機が特別な意義を与えられていたことは、彼の具体的な分析の序列Ⅱ構成のうちにも示されている。『相違』で与えられたロシア資本主義分析の構成

は、まず第一に西欧資本主義の分析を導入部として、ロシア経済の分析に移るといふ序列から成る。そして、ロシア経済の分析を始めるにあたって、「後進国にとって問題はただ次のようなしかたでのみ定式化されうる。西欧資本主義は高度な社会形態に道を譲る前に、後進国をその渦中に巻き込むことができるか、またできるとすればどの程度においてか。」<sup>(22)</sup>と逆べている。プレハーノフのロシア分析の基本的な枠組は、このような問題設定の上におかれていることに留意すべきである。そしてロシア経済それ自体の分析においても、工業から農業へとこの順序ですすめられる。詳しく言えば、工業の分析ではまず、資本主義的大工業が、次にその影響と支配の下で解体をはじめめる小工業IIクスターリ工業が分析される。そして最後に「農業はほとんどどこでも国民的生産のもつとも遅れた部門であり、資本主義が堅固に工業において確立してはじめて資本主義が占領しはじめる部門である」として、農業と農民経済の分析の位置づけが与えられる。農民層分解の分析は一番最後になって検出されるのである。プレハーノフの『相違』におけるロシア資本主義分析の序列編成II基本構成が以上のようなものであったこと——またそれはレーニンの『発展』の序列編成II基本構成とはまさしく対照的であること——、このことはすでに田中真晴氏が鋭く指摘しているところである。<sup>(24)</sup>

このような基本構成の中に、プレハーノフの右にみた共同体解体論を浮べてみると、第一の論理すなわち「外的解体論」が主軸となり、「内的解体論」(第二の論理)はその補完として位置づけられてくるのは、けだし当然の事柄だといえよう。いいかえれば、プレハーノフのロシア資本主義発展像においては、「内的解体論」(「II共同体の固有の二元性」把握、この論理こそナロードニキ主義の根底的批判となるものである)は、ロシアが西欧資本主義のインパクトによる資本主義化、これを受容しうる内成的基盤を、最小限内側にもっていることを示すこと、——も

しそうでなければロシアの資本主義発展はありえない——、そのような意味をもたされていた、といえよう。(右のように理解することによって、われわれはプレハーノフの「ロシア資本主義発展論」を——レーニンの市場形成理論及びそれを理論的基礎とした『発展』の「内在的發展論」と対比して——「外発的發展論」と特徴づけたのである。)

だが、『相違』にみられるプレハーノフのロシア資本主義像を単に一義的に「外発的發展論」として規定することは必ずしも妥当ではない。そこでは、なによりもナロードニキの共同体論への批判が分析の中心に据えられており、その点にかぎっていえば、共同体の内的解体の論理が一応明確にされている。したがって、ここにはロシア資本主義分析の「内在的發展論」への論理的可能性が充分に伏在しているといえるからである。多かれ少かれ外発的發展としての特徴をもつ現実のロシア資本主義の表象とは別に、いなむしろ、それに意識的に抗しながら、内成的發展のプロセスをあえて拡大して抽出し、それによってロシア資本主義の内部編成と変革主体の内的形成をクローズアップしようとしたのが、周知のようにレーニンであった。レーニンは市場形成表式とマルクス再生産論を理論的基礎にして、発展段階を異にする生産諸形態が並存するロシア資本主義の内部構成(諸範疇・諸編成)を現時点において輪切りにして、一見資本主義とは迂遠にみえる農村共同体の内部に(ナロードニキのいわゆる「人民的生産」の内部に)、ロシア資本主義発展の内的起動力を確認した。同時に、それと国民経済の「頂点」に位置する機械制大工業との内在的発展段階論的な連繋を明らかにしたのであった。こうした視点に意識的に立つことによって、やがて、ロシア農民の土地闘争の意味、第一革命における農民の土地総割替要求に孕まれた生産力的意義(善積可能な小農民経営確立への志向)を把み出すことができるのである。<sup>(25)</sup>

プレハーノフの『相違』には、共同体の内的解体論がつかまれていたことによって、少くともこうしたレーニンの

方向への論理的な可能性が、潜在的だといえやはり残されていたことを否定することはできない。

しかし、プレハーノフ自身は、外的解体論を主軸にして——外からのインパクト、上からの資本主義化という、いわばロシア資本主義の表象にひきずられて——、外発的發展像を拡大させ、レーニンとは逆方向に向って行くであろう。それは初発にそれなりに明確にされていた内的解体論の論理（それはロシア農民経営の奥底に胎動する生産力的胚種を把み出すということにつながるであろう）を稀釈化するプロセスでもあった。そしてまた、それ故に、ロシア資本主義發展の外発性||人為性を強調し、その内発的||自生的要因を否認したナロードニキと、その主張と将来展望を一八〇度異にしつつも、プレハーノフはなおその分析の基本枠組において同質性を残し（資本主義と共同体との対置）、ナロードニキ主義の思想をその根底において完全に揚棄するに至りえない。そしてその結果として、彼はやがてロシア農民の経済と生活を、「東洋的専制論」の視角から照射するに至り、ロシア農民の土地總割替要求の思想を、むしろ「アジア的復古」||「東洋的専制」復古に導く保守的||反動的な思想として把握することになるであろう。したがって、彼のマルクス主義思想は、ナロードニキ主義の思想的核をついに、自己の内に批判的に包摂することができない。プレハーノフにあつては、ロシアにおける「市民的なるもの」の開花は、文字通り共同体の全面的解体の上に、そしてまた共同体（||人民生活）の外部に發展する資本主義、レーニンのいわゆるカデットの||ストルイピンのな資本主義發展の彼方に求められていくであらう。<sup>(26)</sup>

しかし、右にみたように、プレハーノフの初発のロシア資本主義分析（「相違」）には、客観的にはこうした二つの方向性が伏在していた。プレハーノフは、そこにおいてもすでに大きく外発的發展論の方向に一步を踏みだしているが、しかし、それは未だ完全に確定したとはいえない。外発的發展像は、——ロシアの農村共同体||割替共同

体についての認識を彼なりの仕方ですべて——ロシアの伝統的社會構造を「東洋的專制論」の視角から把握するに至ったとき、確立するであろう。マルクス主義への轉換後十年して、ロシアに起った大飢饉を眼のあたりにしてプレハノフは、あらためてロシア資本主義と農業と農村の实情に考察を加えた。このプレハノフの飢饉論は、彼なりのロシア資本主義の構造的、特質、把握を示したものであつて、ロシアの農村社會を「東洋的專制論」の視角から把握する端初となるであろう。

(以下次号)

- (1) 田中前掲書、七三—七四頁参照。
- (2) プレハノフの市場理論の弱点については田中前掲書、七七頁以下参照。
- (3) ヴィツテの工業化政策については、T・H・フォン・ラウエ『セルゲイ・ヴィツテとロシアの工業化』菅原崇光訳、勁草書房が詳しく。
- (4) Г. В. Плеханов, Соч. II, стр. 269-270.
- (5) Там же, стр. 251.
- (6) Там же, стр. 236-239.
- (7) 以下に同じ Там же, стр. 302 и слд.
- (8) Там же, стр. 237-238.
- (9) Там же, стр. 239.
- (10) Там же, стр. 239.
- (11) Там же, стр. 239.



- (12) Там же, стр. 260-269.
- (13) プレハーンフは、農民の純収入に対する公租の比率が、国有地農民の場合には、九二・七五パーセント、旧地主地農民の場合には一九八・三五パーセントにまで達すると、ダニエリソン（ニコライ——オン）の «Очерки нашего по реформенного общественного хозяйства» (1880) から引用している。Там же, стр. 244.
- (14) Там же, стр. 239-249.
- (15) いわゆる人民生活の不變の基礎は、毎日毎時、國家の圧力によつて解体しつつある。おそらく資本主義は「無敵艦隊」と交戦するにはおよばないであろう。それは、資本主義がかりになくても、土地不足と租税の重圧という暗礁にのりあげて破滅してしまふであろう。〔傍点は引用者〕 Там же, стр. 248.
- (16) 以下の體裁とひびくは Там же, стр. 249-260.
- (17) Там же, стр. 253.
- (18) Там же, стр. 259.
- (19) Там же, стр. 308-309.
- (20) Там же, стр. 311.
- (21) Там же, стр. 239.
- (22) Там же, стр. 199.
- (23) Там же, стр. 233.
- (24) 田中前掲書、四二六頁。しかし、プレハーンフとレーニンの対照的な把握が意味することの評価にかんしては、筆者は田中氏と意見を異にする。前掲拙稿の主たる論点もまたこの点にある。
- (25) 前掲拙稿、九一—一〇八頁。

(26) ストルイビン改革は、ブレハーノフによって、ともかくも「西歐化」||「市民社会」への不可避的の道程として把握された。Г. В. Плеханов. Соч., XX стр. 126-127. 石川訳、前掲書、二二七頁。